

「花のお江戸を歩く会」

=江戸の歴史と明治・大正の文学の香りが漂う=

上野恩賜公園～本郷～湯島散歩

平成25年3月30日(土)

【散歩コースの概要】

初期の徳川家(家康～三代家光の頃)が京都の「比叡山と琵琶湖」を江戸に写したのが上野台地の東叡山寛永寺と不忍池です。東大は加賀藩の屋敷跡でその名残である三四郎池を巡ります。湯島には春日野局の墓所が、本郷菊坂周辺には徳田秋声・石川啄木・樋口一葉ゆかりの地が点在。最後は神田明神まで足を伸ばします。

この散歩コースは上野台地～本郷台地の坂道にそって残された、江戸の歴史・生活文化を辿るコースです。江戸の残り香を十分堪能してください。

【散歩コースの詳細】

JR上野駅公園口→正岡子規記念球場→上野東照宮→上野時の鐘→清水観音堂→彰義隊墓所→天海大僧正毛髪塔→不忍池弁天堂→無縁坂→(三菱資料館＝土日休館)→講安寺→東京大学(裏口入学?)→三四郎池(小休止15分)→東京大学赤門→樋口一葉桜木の宿跡(法真寺)→徳田秋声旧宅(都史跡)→石川啄木縁の蓋平館跡→新坂→菊坂下(ランチタイム)→樋口一葉縁の旧伊勢屋質店→菊坂→宮沢賢治旧居跡→炭団(たどん)坂→坪内逍遙旧宅跡→本妙寺坂→本妙寺跡→赤心館→菊富士ホテル跡→文京ふるさと歴史館(小休息10分)→春日通→桜木神社→本郷薬師と十一面観音→本郷「かねやす」→麟祥寺(春日野局墓所・東洋大学発祥の地)→湯島天神(小休息)→解散。

①◆正岡子規記念球場◆

正岡子規(1867～1902)は俳人、歌人、随筆家であり、現在の愛媛県松山市に生まれた。名は常規(つねのり)。子規は、明治時代のはじめに日本に紹介されて間もない野球(ベースボール)を愛好し、明治19年頃から同23年頃にかけて上野公園内で野球を楽しんでいた。

子規の随筆『筆まかせ』には、明治23年3月21日午後の上野公園博物館横空地で試合を行ったことが記されており、子規はこのとき捕手であったことがわかる。子規の雅号のひとつに、幼名の升のぼるにちなみ「野球(の・ぼーる)」という号がある。子規は野球を俳句や短歌、また随筆、小説に描いてその普及に貢献した。ベースボールを「弄球」と訳したほか「打者」「走者」「直球」などの訳語は現在も使われている。これらの功績から平成14年に野球殿堂入りをした。

子規が明治27年から同35年に亡くなるまで住んでいた住居は、戦後再建され「子規庵」(台東区根岸2-5-11)の名で公開されている。上野恩賜公園開園式典130周年を記念して、子規の句碑を建立し、野球場に「正岡子規記念球場」の愛称が付いた。

②◆上野東照宮◆(重要文化財)

1616年、2月4日、お見舞いのために駿府城にいた藤堂高虎と天海僧正は、危篤の家康公の病床に招かれ、三人一つ所に末永く魂鎮まるところを作ってほしいという遺言を受けました。そこで藤堂家の屋敷地であった上野に1627年に東照宮を造営し、1646年には正式に東照宮の宮号を授けられました。

1651年に三代将軍・徳川家光公が大規模に造営替えをしたものが、現存する社殿です。金箔をふんだんに使い、大変豪華であったことから「金色殿」とも呼ばれています。当時は東叡山寛永寺の一部でしたが、戦後神仏分離令により寛永寺から独立しました。その後、戦争や震災などの災厄に一度も倒れることなく、江戸の面影をそのまま現在に残す、貴重な文化財建造物です。

東照宮とは、徳川家康公(東照大権現)を神様としてお祀りする神社です。日光東照宮、久能山東照宮が有名ですが、全国各地に数多くあります。そのため、他の東照宮と区別するため上野東照宮と呼ばれていますが、正式名称は東照宮です。

春はぼたん・桜の名所として、秋は紅葉狩り、お正月は初詣や冬ぼたん鑑賞の方で大変賑わい、開運・学業などの祈願成就を願う方が後を絶ちません。また、本格的な江戸建築を間近でご覧になれる神社として、この頃は外国人観光客も多く見られます。御祭神:徳川家康公 徳川吉宗公 徳川慶喜公。

③◆上野時の鐘◆

＝花の雲 鐘は上野か 浅草か＝ 芭蕉が詠んだ句はこの鐘のことである。時の鐘は、はじめ江戸城内で撞かれていたが、寛永三年(1626)になって、日本橋石町三丁目に移され、江戸市民に時を告げるようになったという。元禄以降、江戸の町の拡大に伴い、上野山内・浅草寺のほか、本所横川・芝切通し・市谷八幡・目白不動・目黒円通寺・四谷天竜寺などにも置かれた。

初代の鐘は、寛文六年(1666)の鑄造。銘に「願主 柏木好古」とあったという。その後、天明七年(1787)に、谷中感応寺(現、天王寺)で鑄直された、ものが、現在の鐘である。正面に「東叡山大銅鐘」、反対側には、「天明七丁末歳八月」、下に「如来常住、無有変易、一切衆生、悉有仏性」と刻まれている。

現在も鐘楼を守る人によって、朝夕六時と正午の三回、昔ながらの音色を響かせている。なお、平成八年六月、環境省の、「残したい日本の音風景一〇〇選」に選ばれました。

④◆清水観音堂◆(重要文化財)

清水観音堂は、寛永寺を開創した天海が京都清水寺を模して寛永八年(1632)に創建した。当初、現在地より100m余り北方の摺鉢山上にあったが、元禄七年(1694)この地へ移築し、現在に至っている。堂宇は桁行五軒梁間四間、単層入母屋造り、本瓦葺、とくに不忍池に臨む正面の舞台造りは、江戸時代より浮世絵に描かれるなど著名な景観である。

毎年9月25日には、清水観音堂では奉納された人形を供養する行事がある。近年老朽化が目立ち、平成二年より全面的な解体・修復工事を実施、平成八年五月に完成した。この間、移築年代を元禄九年とする定説をくつがえす元禄七年の棟札が発見されるなど、様々な事実が明らかとなっている。

本尊は千手観音像で、京都清水寺より奉安したもの、秘仏で平常は厨子内に安置するが、毎年二月初午の日にのみ開扉され、多くの参詣者が訪れる。脇本尊の子育観音は、子供に関するさまざまな願いをもつ人々の信仰をあつめ、願い事が成就した際には身代わりの人形を奉納する。

⑤◆彰義隊墓所◆

彰義隊は、1868年(慶応4年)5月15日、大村益次郎が指揮する薩摩、長州を中心とした官軍と、上野寛永寺寺領域を舞台に、戦争を勃発させます。彰義隊は半日で破れ、彰義隊隊士の死者は266名にのぼりました。

官の命令で隊士の遺体は何日も野ざらしになっていましたが、円通寺の住職と、寛永寺の御用商人の三河屋幸三郎らが彼らを集めて火葬し、円通寺に埋葬されました。

この彰義隊墓所は、彰義隊隊士の火葬場の跡地です。墓碑の高さは、7、6メートルで山岡鉄舟により、「戦士之墓」の文字が刻まれています。2003年まで関係者のご遺族による彰義隊資料館がありましたが、現在は閉鎖。

「彰義」とは「義」を「彰す(あらわす)」という意味と、将軍の腰掛の「床几」という意味のふたつの理由があるそうです。

上野のすぐ近くの南千住に円通寺はあります。このお寺には彰義隊士のお墓と、当時激戦区だった、寛永寺の黒門が保存されています。

⑥◆天海大僧正毛髮塔◆

家康の死後、その神格化にあたり権現号の勅許を計り、併せて日光廟の基本構想をたて、その造営を指導した。その後、将軍秀忠、家光の帰依を受け、江戸城鎮護のため上野忍岡に寺院を

建立する事を進言。寛永三年(1625)東叡山寛永寺を創建した。寛永20年108才にて死去、遺骸を日光山に葬り遺髪を本地に合わせて造られた。

⑦◆不忍池弁天堂◆

寛永2年(1625)天海僧正は、比叡山延暦寺にならい、東叡山寛永寺を創建したが、松山藩主水谷伊勢守勝隆とはかり、不忍池を琵琶湖に見立て、竹生島に因んで、池中に中之島(弁天島)を築き、のち竹生島の宝巖寺の弁財天を勧請し弁天堂を建立した。大祭は9月の巳の日で、巳成金(みなるかね)という。現在の堂は昭和33年の再建で弁天堂は不忍池の中心にある。

⑧◆無縁坂◆

江戸時代の地図にもその名が見える無縁坂、その名前は、坂の上に無縁寺があったことに由来しています。現在、坂の北側には講安寺がありますが、ここにも無縁寺という庵があったようです。講安寺は、漆喰造りの大変個性的なお寺。火事の多かった江戸の町で、建立以来300年たって現存しているのは、この防火建築ゆえです。

もうひとつ、この坂を有名にしたのは、さだまささんの名曲『無縁坂』でした。年若い「母」が、幼い「ぼく」の手を引いて、この無縁坂を上るたびに、いつもため息をついていたことを思い出す。というフレーズから始まるこの歌は、不遇だった自分の母親のことを大人になってから思い起すという物語の歌ですが、坂の名前の物悲しさとあいまって、聞く人に強い印象を残します。

⑨◆講安寺◆

浄土宗専修山講安寺。慶長11年(1606)に湯島天神下に創建され、その後元和2年(1616)に現在地に移転した。外壁が漆喰で何度も塗り込められた土蔵造りの本堂(区指定文化財)は、火事に悩んだ江戸の人たちの防火対策の知恵である。東大・赤門で有名な将軍家斉の息女溶姫の生母であるお美代の方は、明治5年77歳で亡くなるまで講安寺に住んでいた。湯島4-12-13 [

⑩◆東京大学◆

西南戦争勃発直後の1877年(明治10年)4月12日、東京開成学校と東京医学校が合併して、わが国最初の大学「東京大学」が誕生しました。当時は法・理・文の3学部と医学部と予備門の3つの機構で構成された緩い統合体に過ぎず、1878年(明治11年)から大学としての整備が順次なされていきました。まずは学生に学位を授ける権利が与えられ(当時の学位は「学士」一本のみでした)、1880年(明治13年)に後の大学院の先駆けとなる学士研究科が設けられました。これらの変革を皮切りに、本郷の加賀前田家上屋敷をキャンパスとして、3年間にわたって集中的に整備されていきました。(ちなみに、当初は本郷ではなく千葉県国府台に建設される計画がありました。)

⑪◆三四郎池◆

三四郎池の正式名称は、「育徳園心字池」。山手台地を浸食した谷に湧出する泉である。この池は、江戸時代は加賀藩邸の庭園の一部だったが、明治に入って東京帝大に移管され、後に夏目漱石の小説『三四郎』にちなんで、「三四郎池」と呼ばれるようになった。

加賀藩は、天正九年(一五八一)八月、織田信長が藩祖、前田利家(としいえ)に能登一国を与えたことに始まる。現在の赤門から池にかけての一带の地は、大坂の役後に将軍家から賜ったもので、この屋敷は、明治維新後に大部分が新政府の官有地に転ぜられるまで存在していた。育徳園は、寛永十五年(一六三八)、豪奢で風雅を好んだという四代目藩主、前田利常の時に大築造されたという。彼の死後、前田綱紀(つなのり)が加賀藩の五代目藩主だった時にさらに補修された。当時は江戸諸藩邸の庭園中、第一の名園とうたわれた。園中に八景、八境の勝があって、その泉水・築山・小亭等は数奇を極めたものだと言われている。池の形が「心」という文字をかたどっており、「育徳園心字池」という。

⑫◆東京大学赤門◆(重要文化財)

東京大学の赤門といえば、誰もが知る門である。正式名称は、旧加賀屋敷御守殿門といい、文政十年(1827)11代将軍徳川家斉の溶姫が13代藩主前田斉泰に嫁入りしたときに建てられた。赤門は、火災などで焼失してしまったら再建してはいけない慣習があり、この赤門は災害などを免

れて現存している貴重なものであり、国の重要文化財に指定されている。前田家は、この赤門を消防隊「加賀鳶」を置いて守ったといっています。

⑬◆樋口一葉桜木の宿跡◆(法真寺)

「にごりえ」「たけくらべ」…など、現代も読み継がれるすぐれた作品を発表し、24年余の生涯でこの世を去った樋口一葉。一葉は、その幼少期を東京大学赤門近く、法真寺(本郷5-27-11)の隣家で過ごしています。のちに一葉は、その家を「桜木の宿」と名付け、座敷や庭の様子などを雑記のなかに書きとどめ、当時の暮らしを懐かしんでいます。作品「ゆく雲」には、「寺内広々と桃桜いろいろ植わたしたれば…」など法真寺や「桜木の宿」と思われる情景が描写されています。法真寺では毎年、一葉の命日である11月23日に、一葉忌を開催しています。

⑭◆徳田秋声旧宅◆(都史跡)

明治38年から亡くなる昭和18年まで住んだ。庭の業平竹は同郷金沢の室生犀星から贈られたという。今も子孫の方が住み、内部は非公開。

小説家。本名、徳田末雄。明治5年2月1日金沢市横山町に生まれる。明治28年、泉鏡花の紹介により尾崎紅葉の門下に入る。初期には個性に乏しかったが、近所の酒屋をモデルにした「新世帯」(明治42)において初めて独自の作風を生み出し、「徴」(明治44)により自然主義作家としての地歩を確立。大正4年、日本自然主義文学の代表作とされる「あらくれ」を発表。享年71歳。代表作は「徴」、「あらくれ」、「元の枝へ」、「仮装人物」、「縮図」など。

⑮◆石川啄木縁の蓋平館跡◆

啄木が金田一京助の世話になり明治41年9月から翌年6月まで住んだ2番目の下宿蓋平館跡(本郷6-10-12)である。今は旅館太栄館が営業している。ここでは東京毎日新聞に連載された小説「鳥影」をはじめ多くの短歌を作った。一握の砂の冒頭歌詩＝東海の小島の磯の白砂に われ泣きぬれて 蟹とたはむる＝もこの頃の作品です。この歌を刻んだ「啄木由縁の地」の碑が旅館の前庭に建てられている。

⑯◆樋口一葉縁の旧伊勢屋質店◆

万延元年(1860)に創業し、昭和57年に廃業した伊勢屋質店は一葉とたいへん縁の深い質店でした。一葉の作品によると、一葉が明治23年、近くの旧菊坂町の貸家に母と妹と住んでから、度々この伊勢屋に通い苦しい家計をやりくりしました。

終焉の地(現・文京区西片1-17-18)に移り住んでからも伊勢屋との縁は続き、一葉が24歳の若さで亡くなった時、伊勢屋の主人が香典を持って弔った事は、一葉とのつながりの深さを物語っています。

⑰◆菊坂◆

地名は、昔この辺りが菊畑だったことに由来します。今も菊坂を歩くと、家々の軒下には露地植えや鉢に収まった季節の花々や緑がたくさん見られ、心地よい下町の風情が楽しめます。本郷界隈は文学の薫る町ですが、中でもこの菊坂は、明治大正期にとりわけたくさんの文士たちが集った場所です。菊坂文士村と名を付けてもおかしくないほどです。

⑱◆宮沢賢治旧居跡◆

宮沢賢治(明治29年－昭和8年)は詩人・童話作家。花巻市生まれ。大正10年(1921年)1月上京、同年8月まで本郷菊坂町75番地稲垣方2階6畳に間借りしていた。菜食主義者で馬鈴薯と水の食事が多かった。

東京大学赤門前の文信社(現大学堂メガネ店)で謄写版刷りの筆耕や校正などで自活し、昼休みには街頭で日蓮宗の布教活動をした。これらの活動と平行して童話・詩歌の創作に専念し、1日300枚の割合で原稿を書いたといわれている。童話集『注文の多い料理店』に収められた「かしわばやし夜の夜」、「どんぐりと山猫」などの主な作品はここで書かれたものである。

⑲◆炭団(たどん)坂◆

真砂図書館の近くから菊坂に下る急坂で現在は階段になっています。炭団職人が住んでいたと

も、急坂なので転ぶと炭団のようになるとも言われています(団子坂と同じですね)。この坂の上には「小説神髓」や「当世書生氣質」で知られる坪内逍遙の旧居跡がある。

20◆本妙寺跡◆

江戸時代にはこの坂道に本妙寺という大きなお寺がありました。このお寺は、江戸の大半を灰にした明暦の大火(振袖火事)の火元として知られています。最近、本妙寺は冊子を発行して、本妙寺火元説を指定しています。(本妙寺は明治になって、巢鴨に移転)その他にも、鐙坂、梨の木坂、胸突坂などたくさんの小さな坂が菊坂に合流しています。坂の街本郷ですね。

21◆赤心館跡◆

石川啄木(1886~1912)は、「文学の志」やみがたく、明治41年5月、北海道の放浪の旅をおえて上京した。啄木22歳、3度目の上京であった。上京後、金田一京助を頼って、ここにあった“赤心館”に下宿し、執筆に励んだ。赤心館での生活は4ヶ月、その間のわずか1ヶ月の間に『菊地君』『母』『天鷲絨』など、小説5編、原稿用紙にして300枚にもものぼる作品を完成した。しかし、作品に買い手がつかず、失意と苦悩の日が続いた。このようななかで、数多くの優れた短歌を残した。収入は途絶え、下宿代にもこと欠く日々で、金田一京助の援助で共に近くにあった下宿、“蓋平館別荘”に移っていった。= たはむれに母を背負ひてそのあまり 軽きに泣きて 三歩あゆまず = は赤心館時代の作品。

22◆菊富士ホテル跡◆

かつて「菊富士ホテル」が東京都文京区本郷菊坂にあった。このホテルには、大正から昭和10年代にかけて、多くの文学者、学者、芸術家、思想家たちが滞在し、ここを舞台に数々のエピソードを残した。主な止宿者には、石川 淳、宇野浩二、宇野千代、尾崎士郎、坂口安吾、高田 保、谷崎潤一郎、直木三十五、広津和郎、正宗白鳥、真山青果、竹久夢二、三木 清、中條百合子、湯浅芳子、大杉 栄、月形龍之介、高柳健次郎など当時のそうそうたる人達です。このホテルは、明治30年、岐阜県大垣出身の羽根田幸之助、菊江の両親が此の地に下宿菊富士楼を開業し、大正3年、五層楼を新築菊富士ホテルと改名し営業を続けた。昭和20年3月10日、第2次世界大戦の戦災(東京大空襲)に依り50年の歴史を閉じた。(東京都文京区本郷5-5-16(オルガノ敷地内)に記念碑が建っている。→文京ふるさと歴史館(小休息10分)

23◆桜木神社◆

文明年間(1469-1487)、太田道灌江戸築城の折、菅原道真の神霊を京都北野の祠より同城内び勧進されたもの。その後、桜の馬場の地に建立したが、徳川綱吉同所に昌平校設立のため現在に至る。

24◆本郷薬師と十一面観音◆

寛文十年(1670)真光寺の境内に、薬師堂が建立された。当時は、奇病などで病に倒れる人が多数いたが、薬師さまに祈願すると病が治ったといい、多くの人々に深く信仰されていた。

また、「薬師の縁日は本郷の花なり」と詠われるほど、牛込神楽坂の毘沙門天と並んで、縁日の夜店が盛んであったという。真光寺は戦災で世田谷・鳥山に移転し、現在は薬師堂と墓地が残っている。

真光寺は、藤堂高虎によって再建された寺であり、薬師堂とともに十一面観音菩薩も境内に置かれていた。現在は、路地を入ったところ安置されている十一面観音菩薩に驚かされます。観世音信仰が盛んになったのは奈良時代(710~794)からで、温厚で自ら修行の傍ら、多くの衆生を教化、救済してくれるこの像に人々の信仰が集まった。

25◆本郷「かねやす」◆

享保年間(1716~1736)に、現在の本郷3丁目の交差点角に、兼康祐悦という歯科医が乳香散という歯磨き粉を売り出した。これが当たり店が繁盛していたという。

享保15年(1730)に大火があり、湯島や本郷一帯が燃えたため、再興に力を注いだ町奉行の大岡越前守は、ここを境に南側を耐火のために土蔵造りの塗屋にすることを命じた。一方で北側は

従来どおりの板や茅ぶきの造りの町家が並んだため、「本郷もかねやすまでは江戸の内」といわれた。

26◆麟祥寺(りんしょういん)◆=春日野局墓所・東洋大学発祥の地=

春日局は、幼名は福といい、父は明智光秀の重臣斎藤内蔵助利三、母は形部少輔越智道明の女で、はじめ稲葉佐渡守正成の妻となり、正勝、正定、正利の三子をもうけましたが、慶長九年(1604)三代将軍家光公の乳母として召出され三千石を賜りました。

家光公が将軍職に就くため献身的な活躍をし、大奥の制度の確立に尽くしたことは有名です。寛永五年家光公二十五歳のおり、疱瘡に罹り、諸医の手当にも験がなかった時、局は齋戒沐浴して東照大権現の神前に詣で、「将軍の病が平癒したら今後私が病気になっても絶対に薬を服用しません」と祈りました。

その忠誠心に感応してか、日ならずして家光公の病気が回復しました。そのため局は身の終わる迄鍼灸薬餌を一切用いなかったと言うことです。

寛永六年京都へ上がり御所へ参内し、春日局の号を賜り、後水尾天皇天盃を頂戴しました。同九年再び台命により上洛し、明正天皇より従二位に叙せられました。寛永二十年(1643)九月十四日 六十五歳で卒し、当院墓地に葬られました。

また、1887(明治20)年 井上円了がこの地(麟祥院内)に 私立哲学館を創設。「哲学館大学」の名称を経て、1906(明治39)年「東洋大学」と改称。現在は 白山(文京区)、朝霞(埼玉県)、川越(埼玉県)、板倉(群馬県)の4カ所に キャンパスがある。麟祥院は東洋大学発祥の地でもある。

27◆湯島天神◆

関東大震災と 東京大空襲の2回の災禍に免れた運の強い神社です。かなりの昔(458年)に創建されましたが、湯島天満宮と呼ばれるようになったのは菅原道真公を祭った 1355年2月からで、その120年後、太田道灌によって修建されています。徳川家康の江戸入りの際神領5万石を寄進され、その後も江戸幕府の崇敬を受けています。境内の梅園の見事さと泉鏡花の「婦系図」の舞台になった事が有名です。(解散)

<メトロ千代田線「湯島駅」又はJR「御徒町駅」>

☆迷子の時は⇒090-8583-1528(管理人ひで携帯へ!!)☆